

馬込遺跡(印西市)

■馬込遺跡(千葉県) 所在地:印西市平岡 問い合わせ:千葉県文化財センター(電話:043-422-8811) 記事抄:1997年に出土した「瓦塔」の破片(高さ106.5cmと105cm)を調査したところ、奈良時代末から平安時代(8世紀末~9世紀前半)に造られたとみられる七重塔2基であることが判明した。一つの遺跡から七重塔が2基出土したのは国内初めてで、製作技法が千葉市周辺で作られた須恵器と似ていることなどから、他の地域から持ち込まれたのではなく、千葉市周辺や地元製の可能性が高いという。(共同通信10/2)

参考ホームページ

<http://www.chiba-newtown.jp/Fudoki/Fudoki05.htm>

(第三十三回)平岡の七重瓦塔

二〇〇四年十月、千葉県文化財センターは『印旛郡平岡の馬込遺跡から一九九七年に出土した破片を復元した結果、奈良時代末から平安時代(八世紀末~九世紀前半)に造られたとみられる七重塔二基であることが判明した。一つの遺跡から七重塔が二基出土したのは国内初という。出土したのは「瓦塔」と呼ばれる木造建築の塔を模した精巧な焼き物で、それぞれ高さ一〇六・五センチと一〇五センチ。屋根瓦など、木造建築構造の細部まで表現されている』と発表し、全国のメディアに配信された。



馬込遺跡と名付けられたこの遺跡は、自然公園建設予定地の造成に伴う事前調査によって発見されたもので、眼下に利根川、JR成田線を望む標高およそ三〇メートルの台地上である。

以下は「千葉県文化財センター三〇周年記念展・解説シート」の要約である。

『二基とも、相輪(そうりん)や屋蓋(やがい)部を始め、木造建築の細部まで精巧に表現している。形態や成形・調整技法などがほぼ同様で、同一工人集団によって千葉市周辺或いは遺跡周辺で造られた可能性が高い。別々に成形・焼成された屋根と壁部分を一層ずつ組み建てる構造になっている。』

『瓦塔片の集中地点に隣接して、奈良・平安時代の掘立柱建物の柱穴が見つかり、二基の瓦塔を安置した堂と推定できる』

さて、瓦塔のモデルとなった木造の塔とは何なのか。

紀元前五〇〇年、古代インドで仏教が誕生したが、ブッダ入滅の時、弟子たちはその遺徳を偲び、ブッダの骨(仏舍利)を持



ち帰り「ストゥーパ」と呼ばれる墳墓に納骨した。仏教が中国・韓国を経て倭に伝来する過程で、ストゥーパは「卒塔婆」(そとば)と音訳され、形も先の丸い円筒状のものから中国の樓閣建築の様式と融合して、三重塔、五重塔、七重塔などの多重塔となった。

仏像が信仰の対象となったのは、ブッダ入滅から五〇〇年後のことである。昨今、ともすると塔は仏像を納めた金堂や本堂の付属物と思われ勝ちであるが、塔こそ信仰の中心であった。

瓦塔はこれまで全国で四〇〇件以上が出土している。そのうち関東地方からおよそ二二〇件、千葉県で三〇件、印旛沼周辺からは八～九件が調査されていて、かなりの密度である。

佐倉市長熊廃寺址、印西市木下廃寺址は七世紀後半から八世紀前半の様式の屋根瓦が出土したことで知られている。厚さ三センチ、縦横二〇センチを越える瓦の出土は、龍角寺(栄町)のような大寺があったと想像されるが、龍角寺の金堂のような存在を示す遺構や遺物は発見されず、瓦塔の破片が出土している。

瓦と瓦塔の伴出は、大きな瓦で覆われた堂のなかに、瓦塔が安置されていたことを物語っているのではないか。

瓦塔は木造多重塔の写しであると言われているが、馬込遺跡の七重塔は何れの塔の写しであろうか。いま、古代の木造七重塔を観ることができない。かつて奈良東大寺の塔と、各地の国分寺の塔は七重塔であったと言われている。とするならば、馬込出土の瓦塔は下総国分寺(市川市)のコピーであったのだろうか。

出土する瓦塔のほとんどは崩壊して原型に組み立てることは不可能で、馬込遺跡の七重塔の復元は、印西の誇りであり宝物である。

いま、県内を巡回展示されている七重の瓦塔が一日も早く、故郷に帰ってくることを祈っている。

(月刊 千葉ニュータウン2005.2.12)







↑馬込遺跡はこの公園の造成に伴う事前調査によって発見された



馬込遺跡の現況(右奥の建物は印西斎場)

インターネットより

参考ホームページ

<http://chiba-newtown.jp/Koniaku01-20.htm#Doc12>



復元された2基の瓦塔(写真提供 千葉県教育振興財団)

仏教がつなぐ古代と現在

インターネットより

瓦塔の発見と復元

瓦塔とは、文字通り瓦で作られた塔のことです、奈良・平安時代の塔といえば、お寺に建てられた三重や五重の塔のことです。要するに多重塔の瓦製模型です。瓦塔は少量の破片が見つかるだけでもかなり珍しいのですが、馬込(まごめ)遺跡では大量の破片が広い範囲にばらまかれた状況で見つかりました。

この破片を丁寧に復元したところ、思わぬ事実が判明します。通常はたいてい五重塔に復元される瓦塔が、なんとふたつの七重塔に復元されたのです。

印旛沼周辺に七重塔が建っていたかどうかは定かではありませんが、近隣では上総国分寺(市原市)に七重塔があったことが知られています。しかし、実在の塔をモデルにして作られた可能性は否定できないものの実際のところはわかっておらず、またどこで作られたのかもわかっていません。謎の多いふたつの瓦塔は、微妙な違いはあれ大変似ているため、少なくとも同じ工人(集団)によって製作されたと考えられます。

インターネットより

参考

<http://orange.zero.jp/kkubota.bird/shimoosa.htm>





国分寺(下総国分寺跡)

天平13年(741年)聖武天皇が発せられた詔により諸国に国分僧寺・尼寺が建立されたが、下総国分寺は下総の国府近くの当地に建立された。



講堂跡

伽藍配置は、南大門があり、入って右に金堂、左に七重塔、両堂塔の奥に講堂と法隆寺式伽藍配置となっている。

現在の国分寺本堂は金堂跡に建てられており、講堂跡は墓地の一角に保存されている。

東門を出て左へ左へと寺を回り込むようにしていき、しばらくは道なりに北西方向に進む。やがて和洋女子大付中が見えてきて、そちらに直進する道を分け左の方へ行くと国分尼寺跡があった。



下総国分尼寺跡

天平13年聖武天皇の詔により国分寺と共に建立された。昭和8年の発掘調査で、多くの瓦に混じって尼寺と書かれた瓦が見付かり国分尼寺跡と分かった。金堂・講堂跡が園地として保存されているが、その他の伽藍は住宅地や学校敷地となっていて不明。

以上、インターネットより